

市民のページ

文芸たかはし

(敬称略)

短歌
秋空に淡くぼんぼり昼の月音無きままに飛行雲並ぶ

田中弘子(川上町領家)

若き日の凛々しい姿今いづこ腰は曲がりて頭は薄し

梅野八郎(松山)

動員を解かれて帰りし学舎に書も無き吾れら庭の草取る

平 初音(高倉町田井)

台風が行え案じつ長き夜を老いのくらしに心して吹け

森J道子(宇治町宇治)

俳句
孤独なる 身に長寿園の クリスマス

平松幾代(長寿園内)

宵月の 虫の音消し 火燧かな

結城成子(宇治町宇治)

川柳
妻の留守はいと返事のない一と日

中島清市(成羽町吹屋出身)

句を盛る七夜の孫の枕元

叱られた子は廻れ右アカンペ工

入院をしたことしらすはせ参ず

七夕様え茄子に竹の足の牛

中島清市(成羽町吹屋出身)



「高砂」木目込人形
黒川睦子さん(成羽町日名)



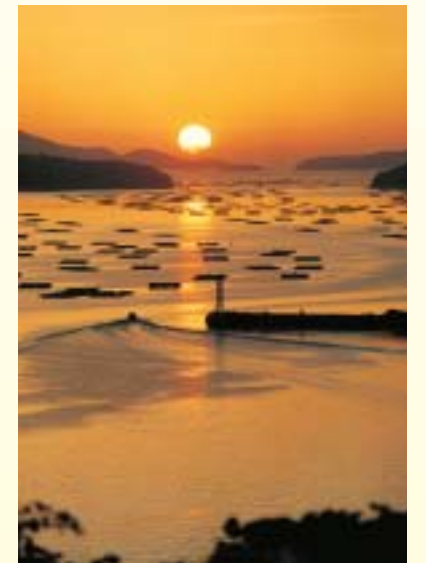
「溪谷の彩り」押し花
丹正ミノルさん(備中町平川)



「騎馬戦」水彩画
増岡孝くん・小6(有漢町有漢)



「赤かぶ」ちぎり絵
藤岡周一さん(長寿園内)



「虫明の朝」写真
難波照幸さん(川上町三沢)



「運動会」手袋人形
東皓恵さん(松原町松岡)

作品の募集について

自作の川柳、短歌、俳句、絵手紙、町の風景写真、絵画など
未発表の作品に限ります。
一人一作品とします。
絵画は、その写真をお送りください。
住所・氏名・電話番号・年齢を明記の上、お送りください。
締め切り 掲載号の前月の末日(必着)

【送り先】〒716-8501(宛先住所不要)
高梁市役所企画課公聴広報係
応募多数の場合は、紙面に掲載できない場合もありますので、あらかじめご了承ください。
提供いただいた写真等は返却できません
Y企画課公聴広報係 ☎0210
Eメール: kikaku@city.takahashi.okayama.jp

地名を あそぶ

今回から、シリーズで各地域の地名の由来を紹介いたします。今月から来年3月までは、旧1市4町の地名を順番に取り上げていきます。

一、高梁

「高梁」の地名は小地名大地名いろいろに使われているので、旧高梁市の内の「高梁町」に焦点を絞って考えてみることにします。

「高梁」は海拔300m〜500mの吉備高原の山々が連なる一角にあつて北の臥牛山四七八・二(B)付近から南へ細長く延びる高梁川のつくった河岸段丘上に発達した山間の町であります。

この地域は、九、一〇世紀前半頃には、賀夜郡大石郷に属していました(和名類聚抄)。その後、承久の乱(承久三年一一二二)後、新補地頭として賀陽郡有漢郷(現有漢町)に在住した相模国三浦氏 族と伝える秋庭重信が臥牛山の太松山に城を築いてのち、高橋九郎左衛門宗康が守護職として抛り、この頃までは、この地を「高橋」と称していたらしく、高橋又四郎範時の時代になって「松山」と改め以後、城下町は「松山」という地名が使われています。「備中誌」に「昔は城下の名を高橋といえるが、元弘(一一三三)〜三三)・正慶(一一三三)〜三三)の頃、高橋又四郎居城の時より高橋を改め松山といえるよし山の名を取て土地の名としたる也」と書いています。以後中世城下町「松山」は天正三年(一五七四)〜七四)の備中兵乱で三村氏が滅ぶまで諸豪が移り変わつてこの地を支配しました。近世になると慶長五年(一六〇〇)小堀新助正次・作助(政一)遠州(父)が松山に来て城下町の建設が本格的に始まり、次の池田氏から、寛永(一六四四)〜元禄六年(一六九三)には水谷氏三代の時代となり、

近世城下町発展の時代を迎えています。以後、安藤・石川、そして板倉と藩主の交替を経て幕末を迎えています。明治二年(一八六九)には佐幕派だった松山藩板倉氏は二万石に減封され高梁藩と改称され「松山」の地名も「高梁」と改められ現代の「高梁」の地名が始まるのです。

「高梁」の「梁」という字は「リョウ」と読み、やな(はり)つばりなどの意味があります。「石の水を絶るを梁と曰つ」とか「水橋なり」(字通)と書いています。

「高梁」という地名の由来については、いろいろの説が言われています。(1)には、古く高梁川(松山川)を高橋川と呼んでいたところから「高橋」の地名となり「高梁」に変化したのだというものです。(2)には「古くは高橋と称したが、高橋九郎左衛門が備中守護として来た際、城主の姓と地名が同じであるのは望ましくないので、理由で松山と改め、その後明治初年になって、伊予松山と混同するため高橋にも「橋」の字に雅字の「梁」を当てて高梁とした高梁市史。(3)吉備高原の台地の端松山城のあった地点の意でタカ(高・ハシ)端(端)という意味地名用語語源辞典。(4)には、(3)に近い説で「梁」は「橋」と同じ意味で「高・端」で段丘の高く切り立った端のこと(市町村地名語源辞典)などの説があります。

いずれにせよ地名の文字は、改変されることが多く、由来が複雑である意味、語源、来歴がわかりにくいものなのです。

(文・松前俊洋さん)



高倉山から見た市街地